

ピースウィンズ・ショップから

期間限定！ピースネイチャーラボから森のクッティーが届きました

ピースネイチャーラボ(以下PNL)の“森里海工房”の焼き菓子が出来上りました！

気仙沼大川流域で生産された森のめぐみをたくさん使用し、森里海のつながりを表現した焼き菓子「森のクッティー」。素朴な素材の味が嘴むほどに感じられる大人の味です。

「森のクッティー」とピースコーヒードリップバッグのギフトセットを期間限定で販売しておりますので、この機会にどうぞ。

※PNLは震災後に気仙沼市唐桑町で設立され、地場産業の六次化を通じた経済復興／雇用創出と、売り上げの10%を植林活動などの森里海の保全活動に活用する“10% for our watersheds”プロジェクトを展開することで、“可能な限り持続可能な”復興モデルを推進しており、PWJは、PNLを設立時から支援しています。



コーヒーの味が
変わったのに
お気づき
でしょうか…

昨年秋から春にかけて、東ティモールで2012年に収穫された新豆が日本に順次到着しています。これを受け、ピースコーヒーの粉200g、焙煎豆、ドリップバッグ、すべての商品の新豆への切り替えが完了しました！

実はコーヒーは農作物なので、ワインのブドウのように毎年味が変わるので、コーヒー専門家にお伺いしたところ、ここ10年で一番美味しいかもしれない、というとても嬉しいコメントをいただきました。ぜひ一度ご自分で味の違いを確かめてみてください。皆様からのご注文をスタッフ一同お待ちしております。

ご注文は、<http://www.peace-winds.org/shop/>

ご注文用紙をFAXまたはTEL:03-5213-4073まで。

※ピースウィンズ・ショップの収益はPWJの支援活動に活用されます。



緊急支援レポート

フィリピン台風ボーフアの被災者に支援物資を配布

PWJは、2012年12月4日にフィリピンのミンダナオ島を襲った台風ボーフアに対応し、現地NGOと連携して、12月14日に東ダバオ州バガンガにて被災者600世帯に食糧や生活物資を配布しました。

支援物資を受け取ったロッシ・イリガンさん

「山の上にあった家は台風によって跡形もなくなくなってしまいました。台風が襲った当日は風のうなるような音とともに、木や家の倒れる音、人びとの泣く声があちらこちらで聞こえていました。政府からお米の配給がありましたが、すぐに食べ終わってしまい6人の子どもたちもお腹を空かせていました。けれども今日、食糧を配布してもらったので、家族にご飯を食べさせることができます。」



物資を配布するPWJ山元

PWJの活動にご協力ください

※認定NPO法人のPWJに対するご寄付は、寄付金控除の対象となります。

【郵便振替】

口座番号：00160-3-179641

加入者名：特定非営利活動法人ピースウィンズ・ジャパン

※特定の地域・活動へのご支援の場合は、通信欄に国名等（東日本大震災の場合はその旨）を明記してください。

【銀行口座】

●PWJの活動全般へのご寄付

銀行名：三井住友銀行 青山支店

口座番号：普通 1671932

口座名義：特定非営利活動法人ピースウィンズ・ジャパン広報口

●PWJの東日本震災支援へのご寄付

銀行名：三井住友銀行 桜新町支店

口座番号：普通 6723184

口座名義：特定非営利活動法人ピースウィンズ・ジャパン

※領収書が必要な場合などはご連絡ください。ご連絡をいたしかねない場合、銀行振込ではご住所が分かりかねますので、領収書を発行できません。

メディア
掲載報告

- 11/28 実用単行本「利き脳片づけ術」にPWJのブックキフが掲載
- 12/11 NHK「クローズアップ現代“震災漂流物”154万トンの衝撃」でPWJの取り組みが紹介
- 外国人ジャーナリストによる東日本大震災の記録「雨ニモマケズ一地震、津波、原発事故を越えて」にPWJ佐藤のインタビューが掲載
- 25ans(ヴァンサンカン)1月号にPWJの活動が紹介
- 每日新聞・日本経済新聞・中国新聞他5社に被災地の子どもたちによるミュージカル「CARE WAVE AID」が掲載
- 1/12 時事通信の記事にハイチに駐在していたPWJ山元のインタビューが掲載
- 1/25 NHK Eテレに被災地の子どもたちによるミュージカル「CARE WAVE AID」の子どもたちが出演
- 月刊「生涯学習」2月号に三井化学㈱とPWJの東北支援活動が掲載
- 2/13 TBS「ひるおび！」・日刊スポーツ朝刊で森のクッティーが紹介

支援のプロを、
世界の現場へ



陸の孤島 ファンガックに井戸を

—南スーダン—

町の中心部、小学校の校庭で掘削機がうなりをあげて土を掘り下げている。地域で初めての井戸掘削の様子をひと目見ようと、50人あまりの人びとが期待を胸に現場に集まった。

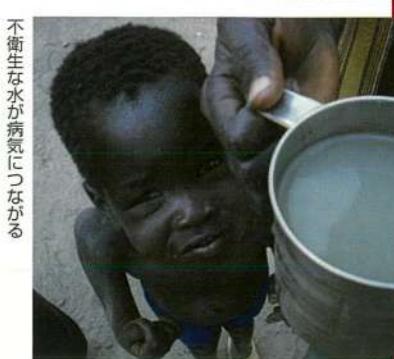
2012年11月、PWJ(ピースウィンズ・ジャパン)は南スーダン・ジョングレイ州の最北に位置するファンガック郡に5本の井戸を掘削した。昼間の気温は40度以上、乾季のため地面はひどく乾燥し、ところどころ亀裂ができていた。

ファンガック郡は、周囲を川に囲まれ陸路ではアクセスできないため「陸の孤島」と呼ばれている。川から離れて住む人びとも、暮らしに必要な水はナイル川から得ており、往復2時間以上かけて水くみに行く。しかし、そうして手に入れた水は茶色く濁っており、住民の間で下痢が蔓延している。このような厳しい状況にも関わらず、2011年まで反乱軍と政府軍との激しい衝突が続き治安が悪化したため、国際機関や他のNGOも支援を行うことができなかった。

PWJは小型の井戸掘削機を隣国ウガンダで手配し、南スーダンの首都ジュバから水路で1週間かけて輸送した。現地では車も使えないため、住民や現地政府関係者を徒歩で訪ね、掘削地の選定について話し合いを重ねた。掘削機や資材を運ぶ時にはロバを使用した。

村に井戸ができるということは、安全な水を飲めるようになるだけではない。これまで水くみに使っていた時間を、子どもたちは勉強に、女性は他の家事に充てられる。PWJが井戸を作ることで、地域の人びとの未来に向か、さまざまな可能性につなげることができる。

これからもできるだけ多くの人びとに、清潔な水、未来の希望につながる水を届けるため、PWJはジョングレイ州で支援を続けていく。



南スーダンの村に井戸ができるまで

南スーダンでは日本人スタッフ4人、現地スタッフ17人で活動しています。

どこに井戸をつくろう？候補地の調査

候補地へ何度も通い、村の人びとからヒアリング。「1番近い井戸はどこ？」「水くみはどうしてる？」などあらゆる質問を複数の人々に投げかけて、ニーズを探ります。中には9,000人に対してひとつという村もあり、特にニーズの高い村を建設地として決定。



村人が主役！井戸管理委員会で話し合い

建設が決まったら、井戸管理委員会を設置。女性の意見が反映されるように女性も委員会に入ることや、管理委員会の役割などを明記した覚書を取り交わします。井戸づくりが、村の人びとの共同作業であることを認識してもらいます。



支援のプロの本領発揮！地質調査

事前に探査機で水の層があるかを調査。最適な掘削ポイントを探します。



大型機械で掘削スタート

村の人びとが見守る中、ドリルで地下を掘り進めること60m以上。村の人びとが口ぐちにPWJスタッフに声をかけます。「今日から掘ってくれるの？ ありがとう、これで私たちの村にも水が出る！」



ついに完成！

掘削機械がめざす水の層に到達したら、パイプを地中に通して掘削終了。手押しポンプを取り付けて、ついに完成！その後に水量や水質のテストも行います。



フォローもしっかりと。井戸の引き渡し式&研修会

いつも村の人びとが集う場所で、井戸使用の注意点や修理方法について研修会を開催。研修会が終了するやいなや、近くの住民たちも次々にポリタンクを手に水をくみに集まってきたきました。



4人の子どもを持つ母親の声 ニャクオトさん

数年前、親戚を頼って戦闘地域から着の身着のまま逃げてきました。洗濯や水浴び、飲料水、調理用の全ての水は、ナイル川からくらできます。本当は沸騰させてから飲みたいのですが、薪も豊富にないので、ほとんどの場合そのまま飲んでしまいます。そのため、子どもたちが下痢になってしまふこともあります。こんなに遠い場所まで来て、井戸を建設してくれるのは皆さんだけです。おかげで、毎日子どもたちに清潔な水を飲ませることができます。本当にありがとうございます！



世界で一番新しい国に井戸をつくる

私が南スーダンで駐在を始めてから早7ヶ月が経ちました。2011年7月にスーダンより独立した「世界で一番新しい国、南スーダン」は未だにインフラが整っておらず、電気は自家発電、水は井戸水のみとなっています。乾季は日中の気温が40度を超えることもあり生活環境はアフリカの中でも過酷です。しかしながら、その分この国よりも自分たちが必要とされていると感じます。現地の人びとは酷暑の中、水や電気がないだけでなく、食糧をはじめあらゆるもののが不足し、部族間衝突が頻繁に起きる中、懸命に生活しています。皆さまからいただいたご支援を励みに、少しでも現地に貢献できるよう、尽力していきたいと思います。

南スーダン駐在 田中聰



PWJ世界の現場から

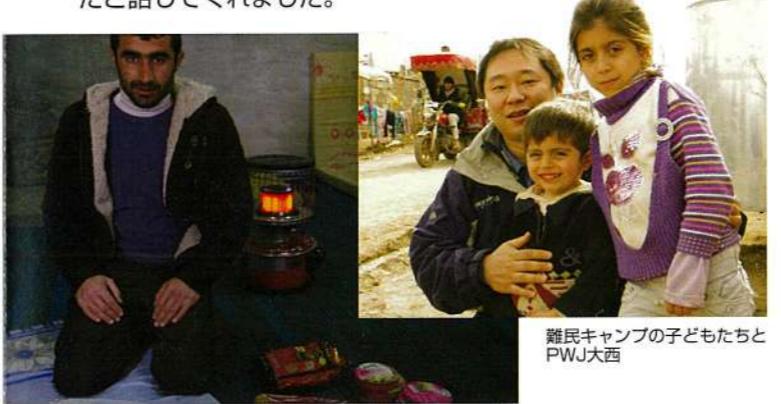


3,500世帯に物資を配布 ～シリア難民支援～

激しい内戦の続くシリアから国境を越えて逃れてきた難民約35,000人が、イラク北部ドホーク州のドミズ難民キャンプで暮らしています。氷点下の寒さが続く2013年1月、PWJはキャンプに住む3,500世帯の人びとに、補助食糧・衛生用品・灯油を配布しました。

ここはまるで時が止まってしまったようです

シリア北部のカミシュリーという町で運転手をしていたモハメッド・ファイザル・カリルさん（27歳）。停電・断水など日常の暮らししが困難となる中、治安が急に悪化したため、奥さんと子ども4人を連れ、約半年前に難民キャンプにやってきました。家財もほとんど持たず、車やトラックを乗り継いでイラク国境の手前にたどりつき、そこから夜間に歩き続けたそうです。キャンプでの生活については「ここには安心はあるけれど、仕事や子どもの学校のことを思うと、時が止まってしまったようです」と、今後の不安は尽きません。PWJから配布されたジャムを子どもたちが喜んでいること、また外に出て泥だらけで帰るときの手洗いや洋服の洗濯に、石鹼がとても役に立ったと話してくれました。



インタビューに答えるモハメッドさん

農業用貯水池の修復を支援 ～スリランカ～

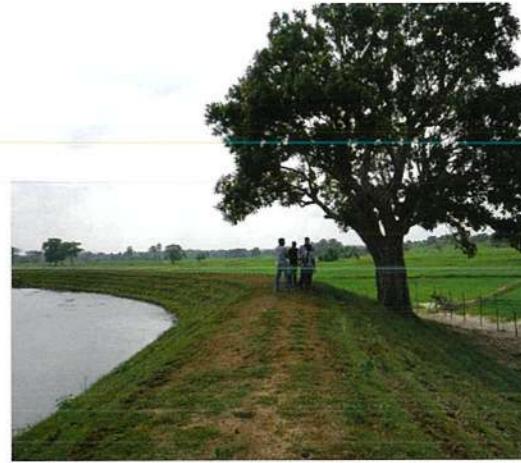
PWJは、スリランカの内戦終結後に故郷に戻った人びとの生活の再建を支援しており、東部トリンコマレ県では、農業用貯水池の修復を住民と協力して進めています。

貯水池は内戦中に放置されて堤防や水門が壊れていましたが、修復により保水・配水機能が改善されることで、農業生産が大幅に伸びます。2012年、PWJは8つの貯水池を修復し、約400世帯の農業の再開に貢献しました。修復された貯水池の隣に住むラジャさんは、「池の水を有効活用し、米のほか、落花生やトウモロコシなどを育てています。『貯水池が修復されたおかげで、ぐっと収入が増えた』と喜んで話してくれました。

スタッフより

スリランカは経済成長が著しく、リゾート地として世界中から注目を集めていますが、東部や北部は観光資源も乏しく、あまり発展していない。内戦によって大きな被害を受けたこの地域の人びとが平穏な生活を取り戻し、他地域とともに発展を遂げられるよう、長期にわたる支援を続けていくことが今後ますます重要と考えています。

スリランカ担当 園田亜矢



2年ぶり、初冬の風物詩アワビ漁解禁 ～南三陸町～

2012年11月、アワビ漁が解禁となりました。震災の影響で2011年の漁が中止されたため、2年ぶりのアワビ漁です。漁師の多くは津波で漁具を流され、すべて買い揃えなければなりません。アワビは、漁師にとって冬の大きな収入源ですが、必要な道具が高価で、漁を再開したい漁師にとって大きな悩みでした。そこでPWJは、南三陸町の漁協と共同で、アワビ漁に必要な箱メガネと竿を支援しました。

夜明けとともに始まるアワビ漁。漁師は、狙ったポイントまで船で移動し、箱メガネと竿を使い、海底の岩に張り付いているアワビをひっかけて収穫します。竿の扱いや船を安定させる技術が求められ、熟練した漁師ほど水揚げも多く、漁師たちは2年ぶりの収穫を喜んでいました。今後もPWJは被災地の経済的な自立を目指して、漁協との取組みを続けていきます。

漁師、高橋さんの声

2年ぶりのアワビ漁で収穫を手にしたときには「やっと取れたなあ」と、うれしい思いもひとしおでした。ただ、周りを見渡すと、船の数が少なく、なかには新しい船も多く見られ、震災の影響を想い、複雑な気持ちになりました。収穫のための道具をすべてそろえるのはとても高額となるため、PWJからの支援は本当にありがたかったです。

